

「能登牛 かわいいよ 能登牛」

—二一トの僕が牛飼いになって能登牛を全国へ届けたい—

株式会社 能登牧場（石川県能登町）

地域の概要

能登牧場は能登半島の北部、石川県^{ほうす}鳳珠郡能登町に位置し、能登町の山間部やや内浦よりにあり、気候は日本海側気候に属している。石川県は年平均気温が約13～14℃、年間降水量は約2200～2500mmで、日照時間が短く、冬には雪が降る。

能登町は能登半島を左手の親指に例えれば、指の腹（爪側の反対）の位置にあり、南東側は内浦と呼ばれる内海で、富山湾に面したなだらかな丘陵地が広がっている。全体が能登山地と呼ばれる海拔300～400mの低山性山地で、主に新第三紀中新世の火山岩および火砕岩類など種々の堆積岩からなっており、



（写真1）専務取締役の平林将さん

外浦側の高洲山（標高567m）を最高峰として富山湾に向かって緩やかに傾斜している。

石川県北部の能登地域は農林水産業と観光

（表1）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭（羽）数	飼料作付面積	経営・活動の内容
平成25年	肉用牛の肥育			2月(株)能登牧場設立
平成26年10月	牛舎建設、 機械導入 肉用牛の肥育	飼養開始		第1牛舎完成（10月） ホイルローダー、マニユアスプレッダーの導入 肉用牛肥育経営開始
平成27年	肉用牛の肥育	113頭		5月初出荷、 平成27年度出荷頭数20頭
平成28年2月	牛舎建設 肉用牛の肥育	234頭		第2牛舎（200頭規模）、堆肥舎（2棟）事務所完成、 5月より第2牛舎肥育素牛導入
平成28年	肉用牛の肥育	362頭		平成28年度出荷頭数190頭 共励会グランドチャンピオン獲得
平成29年	肉用牛の肥育	464頭 (H30.02.01現在)		平成29年度出荷頭数165頭 共励会グランドチャンピオン獲得 全国和牛共進会第9区出品（一等賞）
平成30年	牛舎建設			第3牛舎（300頭規模予定）建設予定地造成開始

業が主力産業であるが、農地は中山間地域が多いことから条件が悪く、小規模農家の比率が高いことが特徴である。

石川県の総土地面積に占める耕地面積は10%、そのうち水田面積が83.3%と稲作の盛んな地域である。農業産出額は548億円で米の割合が52%と高く、次いで野菜が20%、畜産は17%（95億円）である。

畜産ではブランド牛として能登牛（平成19年10月に地域団体商標として登録）の生産に力を入れているが、生産量が少なく、年間1000頭の生産体制を目指している状況である。一方で平成27年3月の北陸新幹線開業の効果もあって能登牛の消費量は増えており、価格は高値で推移している。

能登町は、肉牛を飼育する農家が13戸あり、県内最大の産地となっており、町も能登牛の里と銘打ってイベントや支援を行っているが、高齢化による農家数の減少に歯止めが掛かっていない状況である。

また、能登牛を扱う飲食店・販売店についても町は助成制度の創設により認定店（能登牛銘柄推進協議会が認定）を増やすよう活動しており、能登牛の牛肉はふるさと納税の返礼品としても人気となっている。



(写真2) 広々とした牛舎

経営管理・生産技術の特色

【合同品評会で最高賞を受賞】

能登牛と若狭牛の合同品評会が平成29年12月4日、金沢市の県金沢食肉流通センターで開催され、最高賞のグランドチャンピオンに能登牧場が出荷した能登牛の枝肉が選ばれた。品評会後の競りで、過去最高額の1頭259万8000円(4805円/kg)で競り落とされた。

合同品評会は肥育技術の向上のため毎年開かれており、平成29年度で29回目、最高額の更新は2年連続となった。平成28年度のグランドチャンピオンも能登牧場が出荷した能登牛の枝肉で、この時は1頭254万2000円で競り落とされた。

最高額となった枝肉は、能登牛の中でも特に品質の高い「能登牛プレミアム」で、BMSが12段階中最高評価だったことや、うま味の指標となるオレイン酸の含有率が高いことなどが評価されている。

【立地条件からみた経営の合理性と安全性】

石川県では能登牛の生産に力を入れているが、高齢化する農家の離農等の影響もあり出荷頭数は少なく、年間1000頭の生産体制を目指している状況である。そのような中、群馬県で生産実績のある赤城畜産(有)が石川県に参入し、平成25年2月に(株)能登牧場を設立した。



(写真3) オレイン酸に着目した飼料設計と給与を行っている

(表2) 経営実績 (平成29年度)

経営の概要	労働時間 (畜産)	家族・構成員	2,440時間		
		雇用・従業員	7,104時間		
	<労働従事人数 (家族・構成員) >		4人		
	<労働日数 / 1人 (家族・構成員) >		298日		
	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員	1.2人		
		雇用・従業員	3.6人		
	肥育牛平均飼養頭数	肉用種	333頭		
		交雑種	頭		
		乳用種	頭		
	年間肥育牛販売頭数	肉用種	171頭		
交雑種		頭			
乳用種		頭			
所得率			5.8%		
生産性	肥育 (品種・肥育タイプ)	(黒毛和種種雌若齢)	肥育開始時	日齢	294日
				体重	263kg
			出荷時	日齢	881日
				体重	722.9kg
			平均肥育日数		587日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重 (DG)		1.23kg
		対仕向事故率		0.4%	
		肉質等級4以上格付率 ※		96.0%	
		もと牛1頭当たり導入価格		590,367円	
	もと牛生体1kg当たり導入価格		2,245円		
	(黒毛和種去勢若齢)	肥育開始時	日齢 (月齢)	285日	
			体重	284kg	
		肥育牛1頭当たり	出荷時	835日	
			出荷時生体重	793kg	
		平均肥育日数		550日	
		販売肥育牛1頭1日当たり増体重 (DG)		1.44kg	
		対常時頭数事故率		0.7%	
		肉質等級4以上格付率 ※		93.4%	
もと牛1頭当たり導入価格		684,808円			
もと牛生体1kg当たり導入価格		2,411円			

能登牧場が能登牛の生産を行うことで、能登牛出荷頭数の向上が図られることから、石川県の積極的な事業支援が受けられる。加えて、出荷牛においては世界農業遺産の地で生産された能登牛ブランドの恩恵が期待できる。

【着実な規模拡大で目標を達成】

平成26年に完成した第1牛舎より飼養を開始しながら、平成27年に第2牛舎を建設した。現在は第3牛舎建設予定地の造成中であり、以降、第4牛舎の建設も計画している。

平成29年度に最大稼働となり平成30年度中に当初の目標である年間300頭出荷に達する見込みで、能登牛の出荷頭数の3割を超え、能登牛1000頭生産体制を達成するための中心

的役割を担っている。

また、将来の安定的な出荷を考え、SNSの活用やテレビの番組やテレビコマーシャルへの出演等の消費者に向けての能登牛PR活動にも積極的に参加し、能登牛の知名度アップを図るとともに、畜産GAPにも取り組み中である。

さらに、石川県の肉用牛生産に取り組む若手生産者の協議会設立を計画し (平成30年10月発足)、飼養技術の向上やPR活動による能登牛の知名度向上を目指している。

【優れた飼育技術】

能登牧場の平林将専務は、赤城畜産(有)で2年間学んだ実績のある飼養方法を踏襲し、1頭1頭にしっかり食べさせる基本を大切にしており、肥育技術も試行錯誤と改善を常に行っている。改善は、取り組みについて

の目的やリスク等を記載した説明用紙を作成し、従業員に教育している。

この結果、従業員の習熟も進み、肥育成績は年々改善し肉質等級やロース芯面積が向上しており、上物率は98%と向上し、石川県と福井県の合同枝肉共励会で2年連続グランドチャンピオンを獲得した。

先進技術や最先端の機械装置の導入はなく、装置としては自動給餌機がある程度だが、飼養管理では1頭1頭の観察を大事にし、従業員の能力向上による無駄の排除が省力化につながっている。「経営内の無駄をなくすことが重要だが、何でも削減して品質低下を招いてはいけない」と考えており、最終的には



(写真4) 赤城畜産での経験を活かし、天井が高く換気の優れた牛舎を建築

顧客満足度を考えて肉質が低下しないよう考慮しながら無駄をなくすことを心掛けている。

耕畜連携の活動

生産した堆肥は平成29年より近隣の野菜栽培法人に供給し、平成30年は200 tを提供する計画となっている。さらに、能登牛の堆肥を利用するブランド米「能登姫（のとひめ）」の栽培農家に堆肥を供給している。「能登姫」は、能登町内12戸の水稻農家が立ち上げた「能登町おいしいお米づくり研究会」により生産された能登町産ブランド米である。能登牧場は堆肥供給側として「能登町おいしいお米づくり研究会」に参加し、能登牛の堆肥で作った能登町のおいしいお米を作り活動に協力している。

地域に対する貢献

上述のように、地域のブランド牛である能登牛の生産量拡大に貢献しており、また生産した堆肥はブランド米「能登姫」の生産に活用されるなど、地域のブランド農畜産物の推進に貢献している。平成30年10月に発足する能登牛の若手生産者を構成員とする協議会では副会長を務める予定であり、能登牛生産の



(写真5) 新しい飼養方法を模索するため総飼養頭数の1割で比較対照実験を実施している

中核的農家としての役割を担っている。

従業員のうち石川県出身者は3人であり、地域の雇用の創出に貢献している。なお、現在、県内出身者2人を追加で雇用した。また、従業員の働きやすさを考え、牛舎近くに宿泊施設を借り受けて、無償で利用できるようにするなど就業環境に配慮しており、現時点で採用者に離職者がいない。

将来の方向

発表者である専務取締役の平林将さんは、明治大学大学院会計専門職研究科で学んだ経験から、牧場では事務を担当することとなっているが、現状は飼養管理等も含め、仕入れ以外のすべてを行っている。素牛の仕入れは父と株式会社能登牧場の社長である兄が行っているが、2人が能登牧場に来るのは1ヵ月に1～2回と、年5回の北陸3県和牛子牛市場開催時のみであることから、実質的にはまだ35歳と若い将さんが1人で経営している状態であり、経営の継続性は高い。

さらに増頭を計画中で、現在、第3牛舎建築中（地盤整備工事中）であり、今後は1120頭の飼養規模まで経営を拡大する計画である。